

二転三転の説明

石巻市教育委員会の説明は矛盾が多く、二転三転しています。文科省が立ち上げた第三者検証委員会も、途中で事実解明を放棄した形で、2014年3月に終了しました。説明を聞く度に、あの日の校庭が、子どもたちの命が、どんどん遠ざかっていく気がしました。二つだけ例をあげます。

「引き渡し中に津波」

2011. 3.16 校長が市教委へ報告（校長は、震災当日は不在だった）

2011. 4. 9 最初の説明会

市教委は「地震でバキバキと木が倒れ、山へ避難できなかった」と説明。地震による倒木は1本もありません。

2011. 6. 4 2回目の説明会

5月に行った聞き取り調査をもとに説明。倒木は「あったように見えた」に訂正、避難開始は津波の12分前と説明。時間だからと途中で打ち切り。取材には「遺族は納得」「説明会はこれで最後」と答える。

※聞き取りのメモ等、資料はその後すべて廃棄

2012. 5月 2011.3.16の報告書が判明

「引き渡し中に津波」とあります。「倒木」の記載はありません。震災間もない頃に、ほとんど避難していないことが分かっていたのです。

この報告書の存在も、2012年5月に指摘を受けるまで明らかにされませんでした。

引き渡し中に津波

2011. 3.16

校長が市教委へ報告
(2012年5月に存在が判明)

このような報告がありながら
「12分前に避難開始」と説明

「山さ逃げよう」

これは2回目の説明会の読み原稿です（2011年6月4日）。子どもたちの証言をもとに作成。この時点で市教委は、山への避難を訴えた子どもの存在を認めています。

ところが、報告書には記載されず、聞き取り調査のメモは一斉に廃棄されました。複数の児童が聞き取り調査で証言したと話していますが、市教委はそのような証言はなかったと言います。聞き取り時の資料がないので、いつの間にか曖昧になり、説明が二転三転します。検証委員会でも進展しませんでした。

あの日山への避難を訴えた子ども、そして、亡くなった友だちのことを一生懸命話した子ども達の言葉はなかったことにされたままです。

防災無線のサイレンがなって、「大津波警報が出ました。海岸沿いは危険ですので高台に避難してください」という声を聞いた。それを聞いて、「ここって海岸沿いな」という女子や「山さ逃げよう」とかいう男子がいたが、そのまま引き渡しを続けた。先生

〈2012.3月〉
市教委としては
押さえていない

〈2012.7月〉
「ここって海沿いな」という
女子と書くと「山さ逃げよう」
とかいう男子と書きたくなる

〈2012.8月〉
子どもの記憶
は変わるもの

〈2012.9月〉
「山に逃げよう」とい
う子どもがいたかどう
かは重要ではない

〈2014.1月〉
子どもではなく、
保護者に聞いた
のかもしれない

こうした矛盾点をあげればきりがありません。

矛盾点の指摘とその言い訳の繰り返しで、核心的な議論になかなか進みません。

つらく悲しい出来事ですが、だからといって目を背けないでほしいのです。ましてやごまかしてはいけません。

どうすれば、子どもの命にしっかり向き合った話し合いができるのか、模索しています。

